

授業科目
担当教官
科目区分
受講生数

哲学1：倫理学Ⅱ：キャリアデザイン論Ⅱ
寿 卓三
教科専門（2回生、3回生、2回生後期）
29：13：13

1. 授業評価（5段階：a 良い～e 悪い）

問1 出席状況

a19:1:4 b5:8:2 c4:2:6 d1:2:1 e0:0:0

問2 講義への意欲

a9:4:5 b18:5:8 c1:3:0 d1:1:0 e0:0:0

問3 講義のテーマ・目的の明確化

a3:0:1 b19:5:8 c6:8:3 d1:0:1 e0:0:0

問4 学生同士の話し合いの有効性

a15:1:8 b10:5:5 c3:5:0 d0:2:0 e0:0:0

問5 学生の発言への寿の対応の是非

a24:13:13 b5:0:0 c0:0:0 d0:0:0 e0:0:0

問6 寿の授業への熱意、工夫

a16:8:11 b10:5:2 c1:0:0 d2:0:0 e0:0:0

問7 授業のレベル

a1:0:3 b14:4:7 c6:7:2 d7:2:1 e1:0:0

問8 講義の収穫

a15:8:12 b11:4:1 c2:1:0 d1:0:0 e0:0:0

問9 講義のお勧め度

a12:6:7 b12:5:6 c2:2:0 d1:0:0 e0:0:0

問10 この授業でよかった点

【哲学Ⅰ】

自分の身近なことと社会とを結びつけて考えることができた。考えることのおもしろみを感じることができた。

【倫理学Ⅱ】

どうしようもないことにも目をそむけずに自分の中にとり込むこと。そして、過去から得たことを活かした未来のために今を生きること。

【キャリアデザイン論】

ただ就職難だという規定を知るだけでなく、なぜそうなったのか、どうすればより良い生を送れるかという問題について考えたのがよかった。哲学もとっているのだから、その授業やまた他の授業ともつなげて考えることができた。

問11 改善すべき点

【哲学Ⅰ】

・話し合いはいいと思う。が先生の話とちゃんと理解できているという前提があっての話で、わかってないと教え合いで終了してしまうのが現状。

・意見がでないとムダ話をする。話を曲げる人の存在が邪魔になることがあった。話がムズカシすぎて考えられなかった。生徒同士でギロン

することはまだまだ力がそなわってなく感じた。しかし、今からこのようなことは必要だと思う。

・いつも先生が討論のテーマとなる文章を用意してくださっていたので、たまには学生が何か話し合いたいものを持ってくるのもおもしろいかなと思いました。

・話し合いが盛り上がりすぎて時間が全然足りなくて、まとまらないし、いろんな意見が出すぎて混乱したままなので、この気持ちをどうしたらいいかわからないです（笑）。整理する時間も必要かも…

【倫理学Ⅱ】

理解できていないまま進んでしまい、その後の話についていけないことがあった。質問がしにくいときがある。

【キャリアデザイン論】

かなり福祉的な要素が多かったように感じた。実際のキャリア形成についてもう少し学びたかったと感じました。

2. 授業者からのコメント

教員養成のあり方をめぐる議論はまだまだ不透明である。しかし、教育が様々な困難に直面している現実を考えれば、教員養成のあり方も大きく変わるべきだということは贅言を要しないであろう。教育が直面している課題は様々であるが、その根幹に関わると思われる問題についてまずは愚見を述べておきたい。講義者がいかなる問題意識、課題意識を持って講義を構成しているかが講義の意味を議論する前提となると考えるからである。欧州の政府債務危機は、民主主義のもろさを露見させている。古代ギリシャ以来、民主主義は容易に衆愚政治に転化する危険性を持つことが自覚され、それを防ぐ工夫が成されてきた。それが個・私と全体・公とが直接対峙しない仕組みである。公の不在なしは後退が直ちに、個の放恣に至らない。また、個の放恣が、全体・公の暴走を招来しない。個が相互に調整しつつ自分達の声が社会に届くように練り上げていくと同時に、公も直接的に個に干渉することで個の創造性を挫かないように社会という媒介項を介在させる。それ

がpublicとprivateを繋ぐcommonの領域である。しかし、共の領域の形成には時間がかかり、スピード感の欠如は、停滞感といらだちを生じさせる。こうして私たちは、動かぬ政治よりはブレーキのきかない政治の方がましだという選択をする危険性を抱え込むことになる。今私たちは間違いなくそのような選択に直面している。このような危険性を回避するには、私たち一人一人の政治意識の成熟が必要となるが、教育の重要な課題の一つは、この成熟に貢献することだと私は考えている。

学校空間での学びは、様々な形で実はこのような課題に対応すべく工夫されていると考える。その具体的な事例を挙げると、個別・少集団・全体という学びの形態である。それぞれの児童生徒はそれぞれの物語を生きている。しかし、それをなまの形で表現するとクラスで受け容れられない場合が生じてくる。かといって、クラスの秩序という名のもとに各人の思いを押さえ込んでしまえば、彼らの学びは形骸化してしまう。それゆえ、一人一人が自分の心の奥の声に耳を傾けてそれを明確な声にすべく努め、その声を小集団で相互に練り上げ、さらに全体で議論して「私たちの声」へと高めていく。これは、一人一人の放恣と全体性の横暴とを牽制し独自の「共」を創り上げる営みに他ならない。この作業を積み重ねることで、教育は個の声が美しく交響しあう新たな「公共空間=政治空間」の形成に貢献できるのではないか。

ここで論じている3つの講義は、いずれも個別・小集団・全体という学習形態を通して、生産・流通・消費・廃棄という分業体制を相対化し、廃棄が同時に再生産の場となり、生産者と消費者とを統合した生活者としての当事者意識の涵養こそが市民意識の形成に他ならないという前提の下で展開されている。それ故、講義後のコメントをメールで提出し、そのコメントのなかから授業の展開の深化に連なると授業者が判断したものを選び出してフィードバックし、講義の連続性を創造していくという手法をとっている。

それぞれの講義はその目標は異なる。【哲学1】は、生の無意味化と死の無意味化との連動性について近代化という歴史的動向と関連づけて理解し、さらにこのような事態に対峙する自らの立場を説明できることを目指すものである。【倫理学II】は、過去との対話の積極的可能性について理解し、始源への回帰の

功罪について説明できる力の修得を目指している。そして、【キャリアデザイン論】は、就職難という状況の歴史的世界的社会的背景を理解すると同時に、そのような状況に対峙し、たくましくしなやかに生きる力を修得するために何を成すべきかを考えることを目指した。

最後の講義は、人間社会デザインコースの学生だけが受講する科目であり、前2者は社会科教育専修と人間社会デザインコースの学生が共に受講しているが、専修やコースの相違は学習上全く問題にならなかった。手応えを感じてはいたが、全体として上記の評価に見られるように私の講義としては信じがたいような好成績である。その原因は先に述べたように智の分業体制からの脱却を目指して、メールによるコメント提出や学生の話し合いを積極的に取り入れたことが関係していると考えている。その他の要因として、ケアということに対する私の理解の転換が講義に反映していることが挙げられるかも知れない。私たちは普段暗黙のうちに、一般の人はケアを必要とせず、ケアを必要とするのは何らかの障害を持つ特殊な人たちだけだと思い込んでいないだろうか。しかし、一般の人とは、ケアを必要としない人ではなく、むしろケアされる状況や環境を自力でいつでも調達できる人であり、したがって実は四六時中ケアされている人だと言うべきではなかろうか。心がくしゃくしゃすれば、気の置けない友人に愚痴をこぼしたり、音楽を聴いたり、散歩に出かけたり、酒を飲みに出かけたりと、基本的にはいつでも「気を晴らす」環境に身を置こうとする。しかし、一般にケアが必要だとされている人たちは、基本的にはケアを受けているときにしか、みずからの欲求を充足させたり、心配事を取り除くことはできない。それ以外の多くの時間を、彼らは万事が意のままになるわけではない状況に耐えているのである。つまり一般の人たちこそむしろ絶えずケアの中で癒されていながらそのことを自覚できない人たちであり、ケアが必要だとされている人たちはほんのわずかなケアで満足することを強いられている人たちだとも言える。このような状況に対して私たちの学びはどう立ち向かうのか。3.11以後はこの問いが学びの α であり ω となる。日暮れて道遠しではあるが、私の拙い講義にもなにがしかの学びがあるとすれば、もう一踏ん張りしなければと思う。